

幸福論先進国 ブータンより学ぶ

松本市における 松本市民総幸福 (GMCH) プラン

Gross Matsumoto Citizens Happiness Plan



地域から日本を変える！未来創造塾。

松本政経塾

地域を変えるのは、地域の人財のみである。

はしがき

松本政経塾では今後の国家・地域のあるべき姿を模索している中で、ブータン王国における国民総幸福量（GNH）という指標や取り組みに興味を持ち、数回の勉強会を開催して参りました。そして松本に住む私たち市民が幸福になることは誰もが望むことであり、その幸福度を高める必要性を知りました。

しかしいかにその幸福を実現していくかは難題であり、幸福に対する定義や、価値観の違いなどより、統一した定義や観点を見出すことの難しさも同時に勉強することができました。私たちの生活が経済至上主義の中に置かれ、経済的に豊かになることに主題がおかれ、幸福を実現や体感出来ないという共通認識も得ることもできました。

この非常に難しい課題に対し、私たちの英知を集め、時には様々なディスカッションを繰り返すことで、私たちなりの「松本市民総幸福プラン」をまとめてみました。稚拙なる部分もあろうかと思いますが、ぜひ、ご一読いただき今後の地方都市における各種課題解決への礎になれば幸いです。

最後に今回の勉強会に賛同いただき講師を快く引き受けた松本市役所の井上様、また年末年始の忙しい時期に勉強会に参加頂いた松本政経塾の塾生に感謝申し上げます。

I. ブータンの勉強会より

1 回目

ブータン王国は急速な近代化（欧米化）のなかで、近代化の速度をコントロールしながら、文化大革命に端を発する中国の進出で領土の1割を事実上喪失して、内陸の農村部に強い影響を受けた政治的立場や、全体主義的な伝統を維持しようとする政治に世界的な注目が集まっています。

革新的な面としては、1998年以降の国王権限の縮小を挙げることができます。行政の実権の返上と国家元首への専念を基本として、国民議会に国王不信任決議の権利を付与し、国王定年制を提案、閣僚任命権を放棄し国会議員による無記名信任投票として、任期を5年に定め、内閣を刷新しました。また、行政の実権を担う首相職を設立し、各閣僚が任期1年の輪番制で首相を担当するというシステムを導入しました。また、急速な近代化を憂い、「急ぎ過ぎない開発」を主眼とした自然環境の保護を進めています。

第4代国王として16歳で即位したジグミ・シンゲ・ワンチュクが永らく国王の座にあり、2005年には総選挙が実施されました。2008年に退位することを発表していましたが、予定を繰り上げ2006年12月に譲位し、ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュクが第5代国王に即位しました。2008年7月18日に初の成文憲法典が公布され、名実ともに立憲君主国へと移行しました。

第4代国王は、過激な近代化や外部文化の過度の流入を嫌い、伝統的工法による建物の建築のルール化、伝統的服装の強制、世界的な国の判断基準となっているGNPに代わるGNH(Gross National Happiness:「国民総幸福量」)の提唱等を実施しています。

国民幸福度

当日は2010年4月に静岡総合研究機構 主任研究員鈴木法之氏の発表した調査内容をもとに、GNH(国民総幸福度)の国ブータン 人々は本当に幸せか?というレポートの紹介をしました。

「国民総幸福度」とはGross National Happiness (GNH) の訳であり、物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさも尺度に入れた「幸福度」を表す考え方です。

ブータン第4代国王：ジグミ・シンゲ・ワンチュク氏が国民総生産 (Gross National Product: GNP) に代わる概念として提唱したそうです。

現在、ブータン王国ではGNHの増大を国の開発政策の理念として打ち出しているそうです。

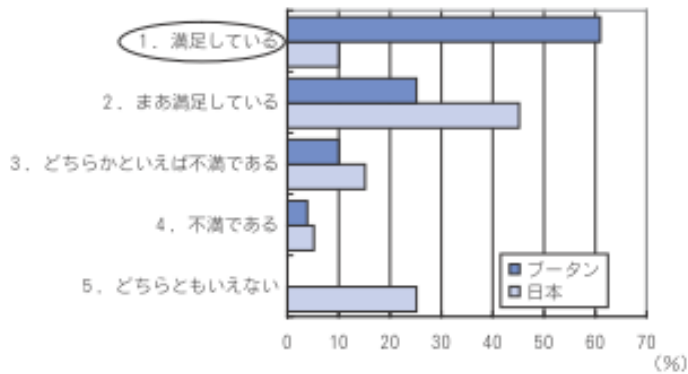
現在、我が国の有効求人倍率は、1963年の調査開始以来の最低水準となっています。国民生活選好度調査(内閣府)によれば、人々の生活満足度に関して「満足している」との回答は全体の1割程度と低水準で推移しているそうです。

一方、ブータン王国は、ヒマラヤの麓に位置し、インドや中国といった大国に挟まれた小国ですが、前国王が提唱したGNH(国民総幸福度)の概念が世界から注目されています。GNP(国民総生産)の概念に代わるものとして位置付けられ、経済的な豊かさのみを追い求めるのではなく、個人が幸せを感じることができる環境づくりを目指しているところに特徴があります。ブータンにおける国勢調査では、国民の9割以上が「幸せ」と回答したという調査結果もあるそうです。時代の変革期にある日本において、地域の活性化と住民の幸福増大を図っていくことは、地方分権が進む地方自治体の役割として最重要課題といえるでしょう。

ブータン国内で行った住民アンケート調査では、103名(都市部68名 農村部35名)中、「あなたは生活全般に満足していますか」(満足度)、「世の中は次第に暮らしよい方向に向かっていると思いますか」(希望度)の2点について、満足度では、「満足」(「満足している」+「まあ満足している」)と回答した人の割合は86.4%です。かつて、ブータンの国勢調査において9割以上の人々が「幸せ」と回答したとされている内容に近い結果が得られたこととなります。

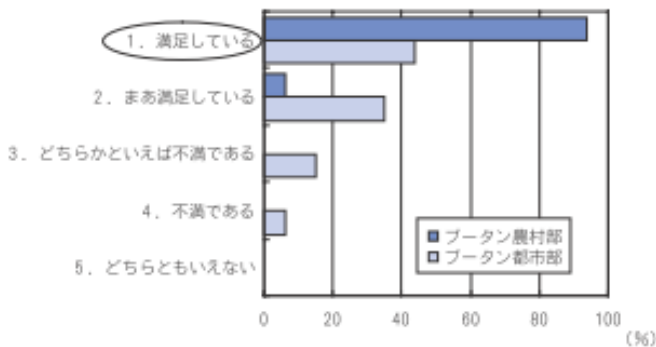
ちなみに、日本では国民生活選好度調査(2008)で同様の質問がされているが、「満足」と回答した人の割合は55.9%です。ただし、純粹に「満足している」と回答した人だけの結果を比較してみると、ブータンでは、61.2%であったのに対し、日本では、10.3%であり、大きく差が開いていることが分かります(図1)。

図1 ブータンと日本の生活満足度の比較



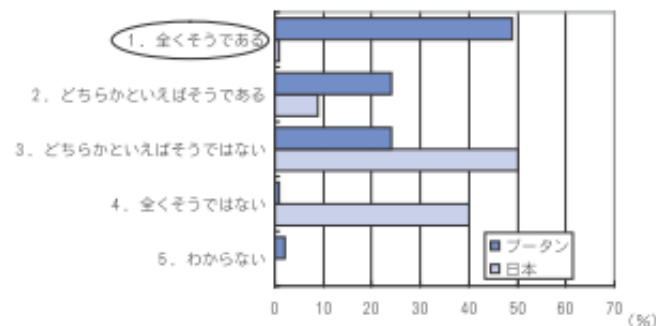
一方、ブータンの集計結果を都市部と農村部に分類してみると、満足度の傾向に大きな違いが見られます。純粋に「満足している」と回答した人の割合を見てみると農村部では 94.3%であったのに対し、都市部では 44.1%と低くなっています (図2)。

図2 ブータン (都市部と農村部) の満足度の比較



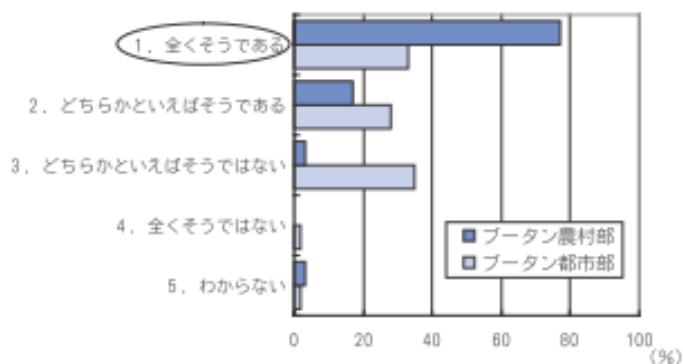
次に、希望度では、「暮らしよい方向に向かっていると思う」(「全くそうである」+「どちらかといえばそうである」と回答した人の割合は 72.8%です。日本でも国民生活選好度調査 (2008) で同様の質問がされていますが、「暮らしよい方向に向かっていると思う」と回答した人の割合は 10.2%です。ただし、「全くそうである」と回答した人だけの結果を比較してみると、ブータンでは、48.5%と半数が希望を感じているのに対し、日本では、わずか 0.7%となり、今の日本では希望を持つことが非常に困難な状況にあることが分かります (図3)。

図3 ブータンと日本の希望度の比較



しかし、ブータンの集計結果を都市部と農村部に分類してみると、ここでも傾向に大きな違いが見られます。「全くそうである」と回答した人の割合を見てみると農村部では 77.1%であったのに対し、都市部では 33.8%となっています（図4）。

図4 ブータン（都市部と農村部）の希望度の比較



住民アンケート調査はサンプル数等の制約があるため、厳密な比較はできませんが、ブータンでは日本と比べ、満足度、希望度ともに高いことがわかります。一方で、ブータン国内においても都市部と農村部では大きな違いが出ていることが明らかです。この要因についての関係機関のコメントが次になります。

関係機関では、GNHの導入経緯として、ブータンでは先進国の経験・モデル等を研究した結果、経済発展だけでは貧困問題、環境破壊、文化喪失を解消できず、必ずしも国民の幸せに直結しないことが明らかになったという。そこで、物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさも尺度に入れた「幸福度」をベースにGNHの概念を導入し、国民の幸せを目指す取組を始めることとしたようです。具体的な政策としては、①健全な経済発展と開発、②文化の保護と振興、③環境の保全と持続的な利用、④よい統治の4つを柱として進めているようです（表1）。

表1 ブータンにおけるGNHの主な取組内容

4つの柱	主な取組内容
健全な経済発展と開発	<ul style="list-style-type: none"> 国民の8割が農民であり、農業振興で経済的な平等を図る 医療費・教育費の無料化で国民の健康・文化の平等を図る 道路等のインフラを整備し、国民の平等なアクセスを図る
文化の保護と振興	<ul style="list-style-type: none"> 民族衣装の着用、伝統的建築様式を規定し、伝統を守る 地域コミュニティ、家族のつながりを奨励する
環境の保全と持続的な利用	<ul style="list-style-type: none"> ブータン国土の約7割を占める森林の保全に数値目標を法制化 木を伐採するのに許可が必要 世界初の禁煙国家
よい統治	<ul style="list-style-type: none"> 民主的な選挙の実施 地方分権の推進

医療費の無料化に関しては、外国人であってもパスポートを見せることなく医師の診察と投薬を受けることができ、しかも無料です。また、伝統文化の面では、人々が民族衣装を着用し、街並みも伝統的建築様式で統一され、国民の多くはそれを誇りと感じていることが窺えます。

森林の伐採制限や世界初の禁煙国家といった国民に対する義務や制限も、自然環境や生活環境の保全を図ることが国民の幸福度を向上させるという高い視点から実施されているようで、そのような政策を推し進める国王を国民が尊敬している雰囲気が感じられます。

ブータン政府でGNHを推進する組織である国家計画委員会によれば、GNHはGNPのように定量的な数字で幸福量を測るものではなく、政府として国民の幸福を増大するために何をすべきか考え、検討するためのものだという。

一般的な経済・社会指標を補うものとして「GNHインデックス（国民総幸福指数）」を導入し、様々な面から国民の幸福に関わる指数を測定し、それによって政策決定者が国民の状況を確認し、政策に反映させようとしているようです。

近年、首都ティンプーを中心に経済開発や情報化が進展し、ブータン国内でも都市部と農村部では格差が出始めているため、その流れをGNHの取組で良い方向に進めていく方針のようです。

一方、ブータン西部にあるプナカ県では、ブータンでは大乘仏教であるチベット仏教カギユ派の支派である、ドゥック派が国教であり、その思想をベースに地域社会や家族のつながりを大切にしているといえます。

GNHにおいても家族や地域との関わりの度合いを測るものとして「コミュニティの活力」を指標としているようです。

ブータン政府によると、日本の生活満足度がブータンと比較して低いと考えられることについては、日本人が皆忙しそうで余裕がなく、人と人のつながりが欠けてしまっていることを要因ではないかとのこと。

ブータン国立研究所は2年ごとに聞き取り調査を実施し、人口67万人のうち、合計72項目の指標に1人あたり5時間の面談を行い、8000人のデータを集めるそうです。これを数値化して、歴年変化や地域ごとの特徴、年齢層の違いを把握します。国内総生産(GDP)が個人消費や設備投資から成り立つように、GNHは

1. 心理的幸福
2. 健康
3. 教育
4. 文化
5. 環境
6. コミュニティー
7. 良い統治
8. 生活水準
9. 自分の時間の使い方

の9つの構成要素があるそうです。GDPで計測できない項目の代表例として、心理的幸福が挙げられます。ブータンの場合は、

正の感情が

1. 寛容
2. 満足
3. 慈愛

負の感情が

1. 怒り
2. 不満
3. 嫉妬

を心に抱いた頻度を地域別に聞き、国民の感情を示す地図を作っているそうです。どの地域のどんな立場の人が怒っているか、慈愛に満ちているのか、一目でわかるといいます。

これまでの日本は、国全体で経済成長という目標を共有し、一丸となってその目標を達成しました。しかし、経済成長ばかりを追求したため、大量生産システムによる大量消費・大量廃棄が習慣化するという問題も生じてきました。社会全体の調和の取れた発展を目指すためには、経済成長を重視しながらも環境や伝統文化の保全なども含めて大所高所から施策を検討し、規制や義務を課すことも重要です。時代の転換点にある今こそ、経済成長は幸せの一つの要素に過ぎないことを行政がはっきりと認識する必要があります。そして、行政が施策を検討する判断基準に、住民の幸福度を取り入れることが重要になってくると思います。幸福度に対する施策の貢献度を分析することによって、経済性や効率性を重視した従来の行政評価では見られない新しい視点で施策の展開が可能になるでしょう。

一方、人々の幸福度を高める要素には様々なものがありますが、ブータンでは、地域コミュニティや家族のつながりを奨励していることが大きな役割を果たしていると考えられています。日本でも、平成19年版国民生活白書において、人が家族・地域・会社とつながりを持つことは、生活満足度を高めることと相関関係があると報告されています。家族と過ごす時間や隣近所・職場の人と行き来する頻度を用いて、生活満足度との関係を統計的に分析したところ、家族と一緒に過ごす時間が長い人、隣近所や仕事関係の人と行き来が多い人ほど、生活満足度が高い傾向にあったそうです。

希薄化が進む家族のつながりや地域コミュニティを再生させることは簡単なことではないですが、行政が可能なところから制度化や法制化を図ることで社会全体の機運を高めることにつながると考えられます。

地域コミュニティの再生に寄与する活動を増やすため、地域と企業のマッチングの仕組みや地域貢献企業の顕彰制度を拡充することも必要でしょう。そのような取組を通じて、人々が家族・地域・会社とのつながりを大切にする価値観が社会全体に根付いていくに違いないでしょう。そして、それはソーシャルキャピタル（社会関係資本。信頼関係、規範、相互扶助、人的ネットワークなど、人や組織のつながりを資本・資源としてとらえたもの）として地域力の基礎となっていくでしょう。

地方自治体は、行政の判断基準の中心に「住民の幸福度」を取り入れるとともに、生活満足度に寄与すると考えられる「家族のつながり・地域コミュニティの再生」を政策の重点目標に位置付けることで、住民が希望と幸福を感じられる成熟した社会の実現につなげていくことができるでしょう。

2 回目

講師：松本市 こども部 こども福祉課 相談・支援担当 井上 直紀氏

第2回目の勉強会では、JICA-国際協力機構から卓球の指導で2009年に6ヶ月間ブータンに滞在した井上直紀氏をお招きして、実際に現地で体感された生の声をお聞かせ頂くとともに、塾生とのディスカッションを行いました。

ブータンについて

国語はゾンカ語ですが、学校の授業はほとんど英語で行われています。食事は仏教国であるために肉・魚は殆ど食べません。(2・6月は肉無し月)但し、味付けはどれも辛いです。信仰によりチョルテン(寺院)の周辺は全てマニ周り(右回り)になっています。国の収入の約4割は水力発電(インドへ輸出)になっています。医療費・教育費はすべて無料です。環境資源保護の為、ライフライン(道路・電気等)はあまり整備していないので550kmはなれた町へ行くのに5日間かけてバス移動します。また、鳥の保護の為、電線が張られていません。

国民97%が幸せと感じていますが、国の考えとしては3%の幸せと思わない人を何とかしようと努力しています。現在国の抱えている問題としては地球温暖化による氷河湖(ブータンの湖)が決壊して町が洪水による被害を受けていることと、若者の仕事がないことです。

1990年代のネパール系住民の移民問題(当時、各国から批判された問題)がありましたが、当時の国王は説得に当たったが結局住民側が受け入れなかった。ただ、この移民により、現在の国政が維持出来ているのではないかと推察されます。

なぜ国民総幸福量(GNH)なのか

ブータンにおいてなぜGNPではなく、GNHなのかという点については、先進国と同じ過ちを繰り返さないためです。隣国(中国・インド)があまりに大きいため、隣の国シッキムは他国を受け入れ先進国と同じ道を歩んだ為にインドに入ってしまった。という事象も要因となっています。

●ブータン国立研究所所長である、カルマ・ウラ氏の言葉

「私たちは幸福を求めて日々生活をするのではなく、
さまざまな関係とのつながりを改善していくことによって、幸福は自然に生まれる」

塾生からの質問

●ブータン人の自然保全意識はどこからくるのですか？

==仏教からの影響だと考えます（輪廻転生）国民は悪いことをしたら生まれ変われないと信じています。だから治安がすごく良いです。

●モモ（ブータンでいう餃子）の中身は何ですか？

==肉を入れることもあります、主は色々な野菜を入れています。

●殺生をしないということで増え続けている野良犬の対策は何かとっていますか？

==捕殺・去勢は現在も行っていないようです。最近は捕獲して遠方に放すことをしているらしいです。

●学校の授業での言語は何ですか？

==国語は「ゾンカ語」で教えています、その他は全て英語での授業になります。

●ゴミの始末はどうしていますか？

==パッカー車で収集して焼却施設で処理しています。

●国旗の龍の意味を教えてください？

==（文献より）龍は、ドウルック（Druk、雷龍の意）と呼ばれるものであり、それはブータンがチベット語の方言で「龍の地」として知られていることを暗示しています。龍の爪についているのは宝石で、富を象徴しています。背景は二つの色に分けられており、それぞれ世俗の君主政治（黄色）と仏教（オレンジ）を象徴しています。

●97%の国民が幸せを感じていると、実際に行ってみて客観的にそう思いますか？

==物質的にはそうでもないが、精神的にはそう思います。仏教にお金は現世のみで来世には持って行けないと信じています。その精神から障がい者は前世で悪いことをした人間として見るあまり良くない風潮もあります。

●ブータンの平均月収はどの位ですか？

==日本円で約 6000 円位です。但し殆どが自給自足で生活出来るので、お金は余り必要ありません。国民には仏教による施しの精神で全ての物を周りの人間に分け与えるという習慣があります。

●ブータンの一番の支援国は日本ですか？

==隣のインドが一番の支援国です。それ故に貨幣価値も単位は違いますが同じです。

●ブータンに観光旅行で行けますか？

==行けませんが面白くないと思います（住むのには良いですが、観光資源もなく、ガイドがついて行動が制限されます）現在、旅行会社への観光の問い合わせが 50 倍になっているそうです。

●ブータンにプールはありますか？

==無いです。体育というものが無いので殆どの人が泳げません。夏に川遊びをする程度です。海拔が 0~5000m と標高差があり、長野県の気候によく似ています。食生活では魚は殆ど食べません。（海魚に関しては無いです）

●肉・魚を食べないで太った人はいますか？

==います。米は沢山ありますし、野菜は油料理が多い為だと思います。

●年 2 回の肉食べない月がありますが肉屋はありますか？

==肉屋以外に薬局・駄菓子屋・八百屋もあります。基本的に自営農家の方が兼業で行っているようです。

●ブータンに行くきっかけは何ですか？

==JICA-国際協力機構で活動をしたいとずっと願っていて、短期活動・卓球指導の募集がたまたまブータンであったことがきっかけ。試験を経て行くことができました。

●ブータンに行った後、変化したことはありますか？

==日本は住み難い国だと感じました。ただ、少し間違った発展の仕方をしてしまった感があります。ただ、個人的にはブータン人のように輪廻転生を信じていませんし、ブータンでの生活が幸せだとは思いませんでした。

塾生の感想

●ブータンへ行ってみたいくなりました。GNHは幸せを考えるきっかけになりました。

●国王が来日して関心をもちましたが、観光はどうかと思いました。生の声が聞けて良かったです。

●良い規律が、良い環境を生むと思いました。

●教育・医療が無料なのはすごいと思いました。他の発展途上国もそうなってくれば良いと思いました。

●日本の50年前と同じ感じがしました。現在の、のんびりとした生活環境と重なり改めて自分の幸せを感じました。

●3%の幸せを感じない国民は海外を知りすぎたせいではないかと感じました。これからインターネットでの情報流入をとめることは出来ないので、今後は課題ではないかと感じました。

●国民が素晴らしいと感じました。

●写真の子ども達の綺麗な瞳がとても印象的でした。本当の幸せを考えるきっかけになりました。

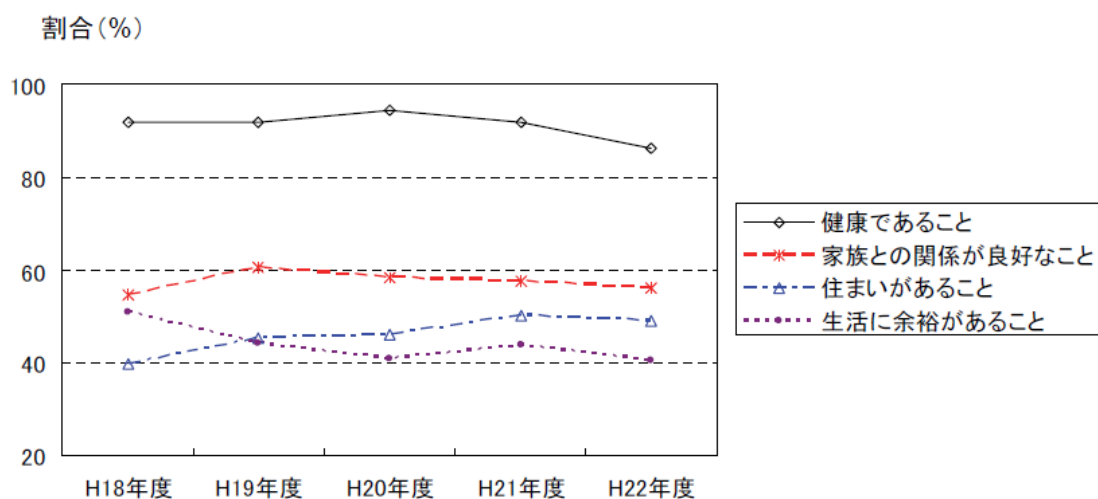
II. 他都市事例研究（荒川区の事例より）

荒川区では平成19年の「荒川区都市構想」の中で、20年後の将来像を「幸福実感都市あらかわ」と定め活動をしています。その一環として区民の幸福度を高める荒川区民総幸福度

（GAH＝グロス・アラカワ・ハピネス）のコンセプトを平成21年に一般財団法人荒川区自治総合研究所の発足と共に、研究プロジェクトをスタートさせています。

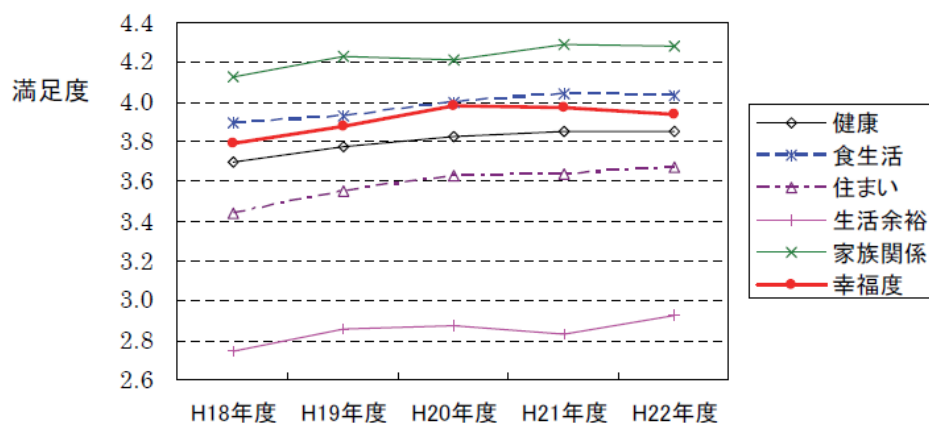
その初段として、平成18年以降に調査している「荒川区政世論調査」がまとめた「幸福」についての調査レポートを紹介いたします。なおレポート内で特に松本政経塾で興味を引く、議論になったものを抜粋しています。ご了承ください。

1. 幸福な生活に必要なこと



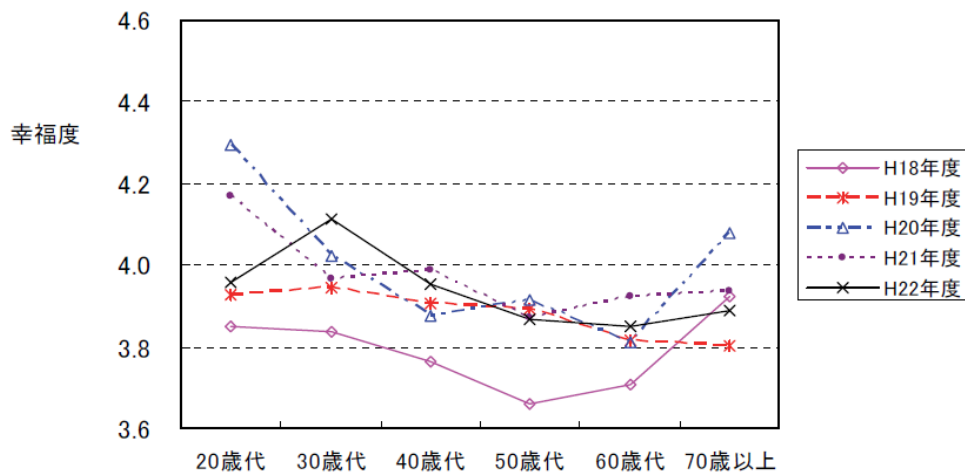
「幸福な生活に必要なこと」について上位4項目のグラフです。多くの市民が「健康であること」が幸福な生活には必要不可欠という結果が見て取れます。

2. 幸福度及び「暮らし」の5項目に対する満足度の経年変化



「健康」に対し幸福になるためには必要な条件ですが、現状では健康に対する「満足度」は高いように思われます。反面、「生活の余裕」という点では、満足度が得られていないように思われます。

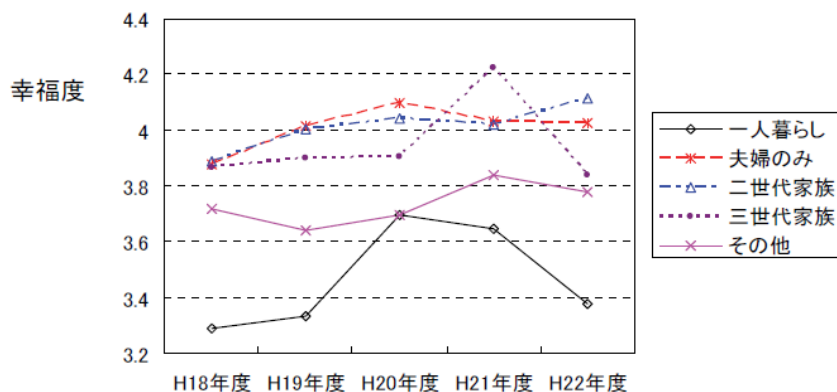
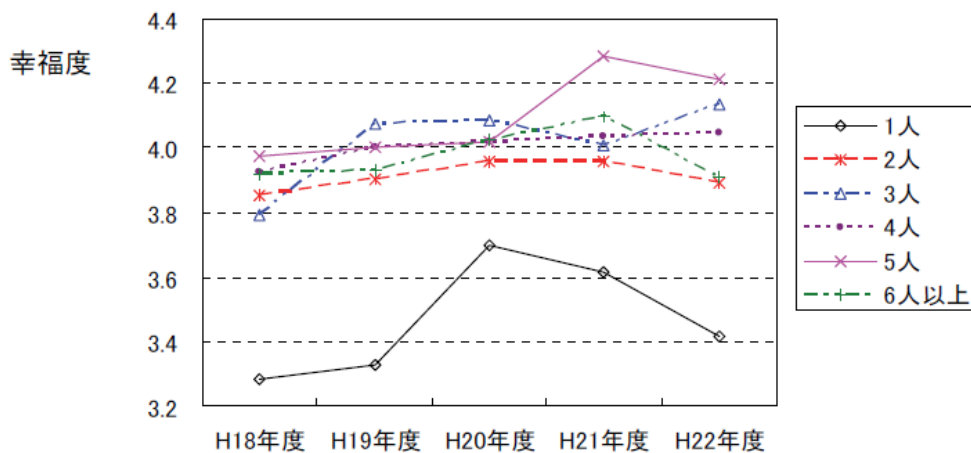
3. 幸福度の年代依存症



年代別に幸福を感じる状況を調査したところ、若い世代と70歳以上の高齢な世代では高く、30代から50代にかけて「幸福度」は下がる傾向が見受けられます。これはイギリスやアメリカ・ロシアなどでも同様な結果が表れ、中間年齢層の幸福度が低いようです。いわゆるU字形の年代依存症と呼ばれています。

特にその要因はレポートには言及されていませんが、いわゆる子育て世代と呼ばれる年代であり、教育費などの金銭的負担などがのしかかり、経済的余裕が少なくなる分（大学に子どもを行かせるなど）幸福感を実感出来ていないのではないのでしょうか？

4. 同居世代の人数依存性



同居人と幸福度の相関関係を調べた非常に興味深いデータです。まず言えることは「一人暮らし」では満足度が低いことです。「孤独感」などが要因と言えるでしょう。2人よりはそれ以上の世代数の方が幸福感は感じられますが、極端な差異はないかもしれません。

現在の問題として「一人暮らし」の高齢者の方々に、きちんとしたフォロー体制が敷く必要があることを松本政経塾内で話しが出ました。複数で生活できる施設へ入所頂くのか、それとも地域で支えていくのか手法は異なりますが、間違いなく「孤独感」を感じないような施策が喫緊なる課題といえましよう。

5. 幸福度との相関関係

図 14 健康と幸福度

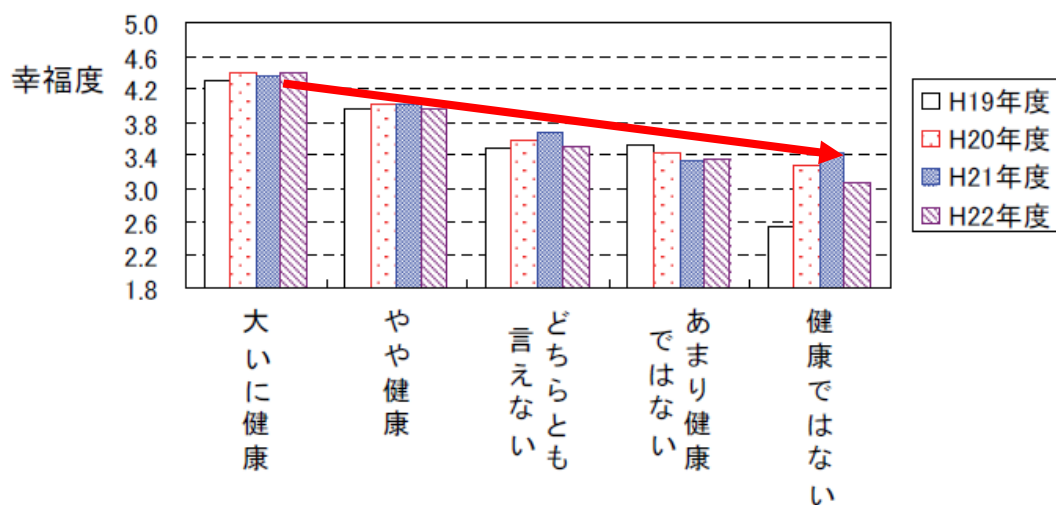


図 15 家族との関係と幸福度

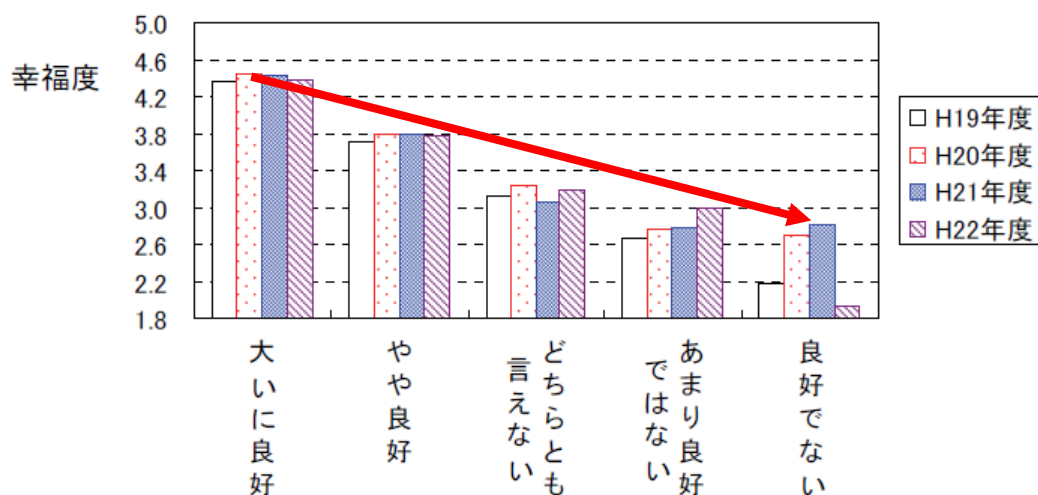


図 16 地域活動・行事への参加と幸福度

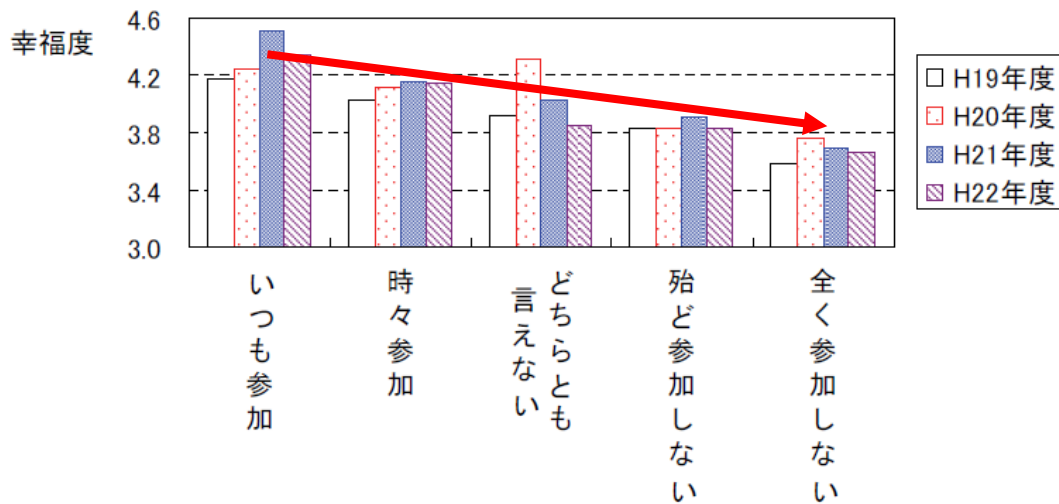
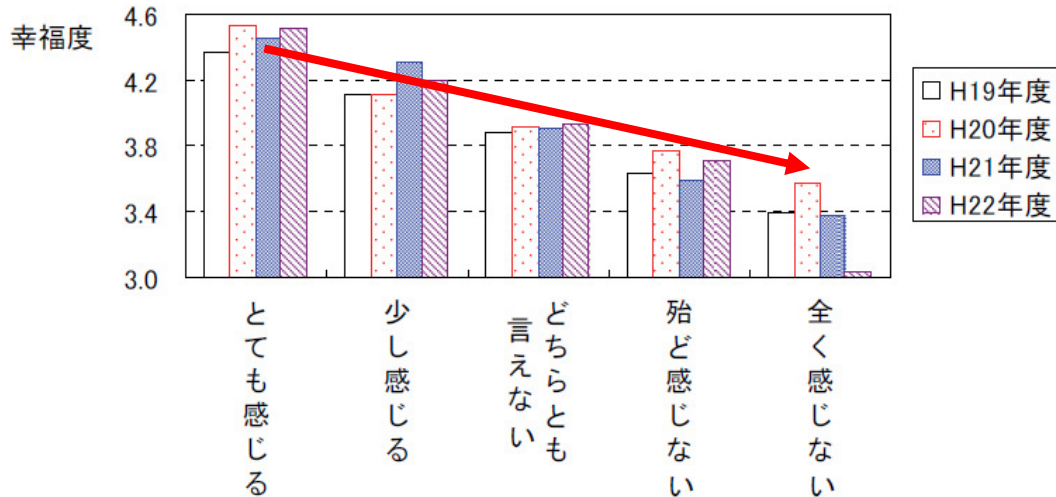


図 17 社会への貢献と幸福度



「健康」「家族との繋がり」「地域活動や行事への参加」「社会への貢献」との幸福度の相関関係を示したグラフです。

- 健康・・・健康であればあるほど「満足度は高い」
 - 家族・・・家族との関係が良好であれば「満足度は高い」
 - 地域活動・・・積極的に参加した方が「満足度は高い」
 - 社会への貢献・・・積極的に貢献した方が「満足度は高い」
- という結果ですが、皆様はどのようにお感じでしょうか？

私たちは至極当然の結果であり、今更調査しなくても判断できるのではという意見が多数を占めました。

またこのレポートで荒川区が行っている施策では「健康」と「子育て」についての活動や指針について報告されています。しかし「健康体である高齢者の一人暮らし」は果たして幸せなのでしょうか？「健康である若者に仕事が無い」ことは幸せなのでしょうか？

私たちは松本市民が幸福になるためには、複数の条件があることを知りました。そしてその優先順位に注目しました。その条件は絶対的ではなく相対的であることは重々承知していますが、あえて優先順位を付けて行政や私たち自身の生活の中で、実際に即座に行われなければならない施策を考えてみました。

Ⅲ. 松本市民を幸せにする条件

ここでブータン国立研究所所長である、カルマ・ウラが国民総幸福量（GNH）について次のように紹介します。



ブータンの平均所得は日本の1/50でも人々の表情は穏やか
幸福は一人ではあえりえない
人と人との関係の中でしか幸福はありえない
その考えは仏教に根ざしている
幸福という事は仏教的に言えば悟りを得る事に近い
幸福は人との関係においてあるから他の人が不幸な状況にある中で
自分だけが幸福である事はあり得ない
幸福を追求する事には責任が伴う
それは私たちの行いにかかっている
幸福は単独ではあり得ないから良い関係を作るには
先ず自分自身の行動を変えて行かなければなりません
それを目指す事が大切だと思います
欧米的な考えでは生活が良くなれば人は幸福になれるといます
確かにそれは社会的進歩には違いないでしょう
しかしそれは仏教から言わせれば非常に低いレベルの話
食べる事に困らないとか人権を犯しませんというような事だけでは
決してみんなが幸福になるとは思わない
もっと上を目指して行く必要がある
そのためには人と人との関係を改善して行く事が重要
他人の幸せがなければ自分の幸せもないのですから
何をもって社会の進歩を計るのかと言えば
人間関係の改善こそ進歩の尺度にすべきだと思っています。

ブータン国立研究所所長である、カルマ・ウラは「人との関係」を基軸にしない「幸せ」はあり得ないと断言しています。確かに先ほど問題視したように「健康な一人暮らしの老人」は幸せを感じないだろうし、「お金持ちの一人暮らし」も幸福感を感じられないかもしれない。

そこで「幸福」になるために必要な条件を政経塾の中で協議してみました。

この視点の抽出は難しく、人によって感覚的な差異はあるかもしれませんが。しかし優先順位を決定していく上で重要な要素になると思います。そこで考える際に出た内容を少し紹介してみましょう。

以前講演会でコップに半分水がある話を聞いたことがあります。その半分の水を「半分しか水がない」のか「半分も水があるのか」という気持ちの持ちよう、物の捉え方は変わってきます。例えば、遭難に遭い喉がからからの状態では、水はダイヤよりも貴重なものとなります。しかし普段の生活では、半分の水しかないと思ってしまいます。「幸福」とは置かれた状況によって、何通りも捉え方が違ってくるため、普遍的なものの定義が非常に難しいことと思われまます。

塾生の一人にお父さんが障害（全盲）を持った方がいました。そのお父さんの非常に印象的な言葉、「自分は不自由であるが、不幸ではない」です。障害を持ったとしても、社会の一員としての役割を感じる場ができれば、不幸とは感じないのです。

また人間の持つ欲求に際限が無いと仮定した場合、常に何かを望み、満足や幸福を得られない状況になるのではという話も出ました。

例えばブランドのバッグが欲しいと思い購入した。しかしさらに高級なバッグが欲しくなる。そしてその欲求によって、次から次へと高価なブランド品を購入し続ける。

人間の持つ物品の購入という意欲が悪いといっているわけではありません。購買意欲が経済を活性化し、国や地域を富ませる構造も理解しています。しかし反面「欲が付きにくい」ことで、いつまで経ても幸福を感じられないということはないでしょうか？

現在の企業経営でも同じ事が言えます。

近江商人の言葉に三方良しという格言があります。お客様良し、取引先良し、自分良しの3者が全て良い状態になることで健全な繁栄が出来るというものです。しかし今の企業経営は「顧客に嘘の情報は流す」「取引先に無理難題を言いコストを下げることをばかりを考える」「自社の社員のロストラに勤しみ解雇を繰り返す」など、自社や経営者自身の利益追求の為に冷血なる施策を行う企業が後を絶ちません。社会影響力の大きい大企業でさえ、平然と行われています。近江商人が聞けば恥ずかしい話です。

人間の欲求は誰もが保有し満足を得ることで幸せになります。しかし際限なく欲求を求めることで他者の利益を奪ってみたり、社会的に許されない事が行われたり、または地球自体を崩壊へ導きます。

即ち、私たちは「欲求」の限度を定め、それを越えた状態を「幸福」であると認識する活動が幸福論の第一歩なのかもしれません。

そこでその「限度」の定義付けや条件を考えてみました。

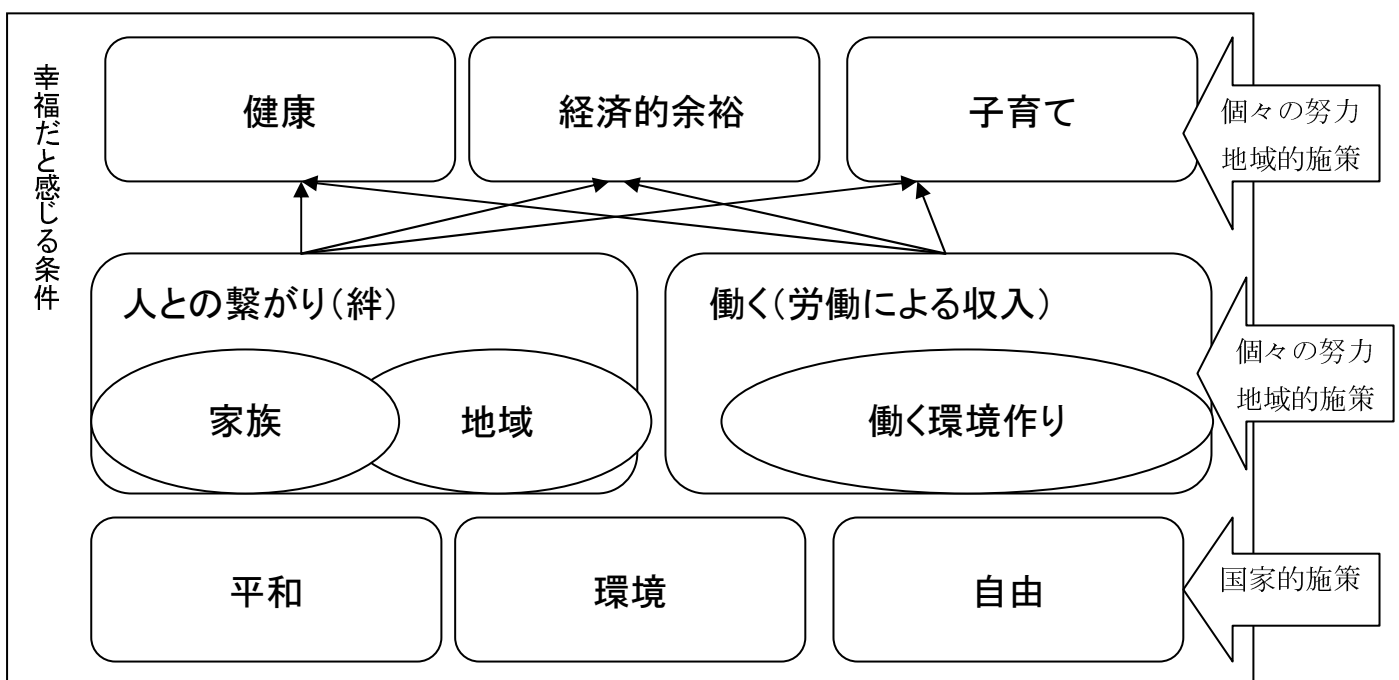
【必要条件】 誰もが望み、叶わないと不幸になってしまう条件

- 平和であること（戦争や国内紛争などが無い）
- 生きるのに適した環境であること（大気汚染や極端な大気変動）
- 家庭や周辺の人々と良好な関係であること（家庭が愛で溢れる、地域で支え合う）
- 仕事ができること（きちんとした収入があること）
- 自由であること（職業の自由・思想の自由）

【十分条件】 誰もが望むが、少々我慢や物の捉え方を変えることで幸せにもなる条件

- 健康であること（大病無く年齢と共に起こる病気を受け入れる心 自然治癒力）
- 経済的に裕福であること（普段の生活が出来るだけの経済的余力）
- 子どもを健全に育てる（心と体が健全に育つ環境、過度な受験などからの脱却）

幸福度を勝ち得るための体系図



幸福になるための条件の基底にある「平和」「環境」「自由」などは個人の努力や小さな基礎自治体で作りに出すことは難しいと思います。戦国自体のように地域ごとの戦争や紛争が無い現在では、日本国という視点で国政によって得る「幸福」の条件と言えるでしょう。

「人との繋がり（絆）」や「働く（労働による収入）」は、国政による施策であることも間違い無いのですが、基礎自治体などの小さな行政ユニットでも支援が可能であり、また個々人の努力も重要なものとなります。同時に、十分条件として定義した「健康」や「経済的余裕」、「子育て」は「人との繋がり

(絆)」や「働く (労働による収入)」と密接にリンクしていきます。

働き収入を得ることで、いざ病気になったときに医者に掛かることも出来ます。経済的余裕も生まれてきます。また子育てにはお金がかかります。

IV. 松本市民を幸せにする施策

松本政経塾の中で『日本で一番住みたい町「松本」』を目指そうという意見にまとまりました。

日本で一番住みたい町にしていくことで、松本市民が幸せを感じる事が出来るのであるという結論からです。

そこで上記でまとめた条件に基づき、各施策を考察してみました。

(1) 人との繋がり（絆）

人との繋がりの中で、一番の基軸となるのが「家族」の絆です。アンケートにもありました通りに一人暮らしは楽な生活ですが、決して幸せを感じるものではありません。

一人暮らしから複数での住居空間

社会的な施策として喫緊な課題は一人暮らしの高齢者の方々です。

いざ病気になったときに知らせる方法もなければ、気に留めてくれる人もいない状況です。

ますます高齢化が進む社会の中で、老人福祉の集合住宅系の施設の構築は、幸せ作りにとって非常に重要な施策といえます。

核家族から世帯住宅へ

女性の社会進出や経済的理由より、今や共稼ぎの家庭は当たり前になってきました。

以前「鍵っ子」という言葉がありましたが、子どもが家に帰ってきたときに誰もいない・・・

そのことで子どもが進んではいけない道に向かうこともありえます。

昔の日本は複数世帯での居住が当たり前であり、子育ては両親だけでなく、祖父母兄弟、即ち家族全体で取り組んでいました。また、年老いていく祖父母を支えていくのも、家族全体で行われていました。複数世帯の住居の構築は、家族内の絆を深めていく上で重要な施策と言えます。

また地域の絆構築も人の幸福には欠かせません。しかし今、地域活動はどんどん希薄になっています。行政内で行われるイベントも高額かつ市民全体へのものであり、費用の割には、人と人との絆を深くする・・・そんなイベントが果たして行われているのでしょうか？

地域行事の活性化

昔から子どもの地域行事である「青山様（ぼんぼん）」や「三九郎」。子どもの数の減少と共に下火になっています。私の町内ではついに「青山様（ぼんぼん）」が行われなくなりました。

また各地にある公民館も、立派な建物がありますが、私たち子育て世代ではほとんど縁の遠い施設です。数千万を超えるようなイベントも否定はしませんが、地域における昔から脈々と続く行事などへの支援にも予算や考えを振り向けるべきと考えます。

町内活動の活性化

町内活動に積極的に参加することで、社会貢献の経験を得て、それによる幸せを感じることは荒川区のレポートにあった通りです。町内活動の推進ということにもっと目を向けて、各種施策に取り組む必要があると思います。

（２）働く（労働による収入）

ある本にこんな事が書かれていました。「人は健康でないから働かないのではない。働かないから健康にならないのだ」即ち人にとって「働く（特に喜びをもって働く）」ことは大変重要です。

しかし現在は、失業率の増加や若年層の就職難など暗い話題が殆どです。

我が松本政経塾にも、大学生が勉学に来ていますが、働きたくても働く先が無いという彼らの悲鳴は一人の社会人として逃げてはいけない課題と考えます。

また職業安定所へ行くと人が溢れています。特に地方都市では、働く先がなく厳しい状況でもあります。民間企業と行政がタッグを組んで、働くという機会創出をしていかななくてはならないと考えます。

自給自足型まちづくり

農産物の分野では「地産地消」という言葉があります。また少し広い分野で「コミュニティビジネス」という言葉もあります。これは地域の資産を地域の人々が作り、地域の人々で消費する、そのような意味が込められています。ブータンの幸福度の施策にも「自給自足」という概念があります。

そこで「自給自足型まちづくり」を推進し、雇用の創出を図ることを目指していこうと考えました。

医・食・住分野に活路あり

私たちの普段の生活には物が溢れ、欲しい物をみつけるにも大変な時代となりました。物を作っても売れない時代と言われる所以です。しかし自分たちの足もとを見てみると、ビジネスの中には様々なチャンスがあるのです。

そこで人が生きていく中で昔から言われている「衣・食・住」に注目してみました。現代は「医・食・住」が重要であると考案しました。衣服が重要でないというわけではありませんが、現在の日本では「医療費の増大」は鰻登りです。医療産業は間違いなく伸びるビジネスです。

「医療産業」創出のために地域行政が取り組む意義や将来に向けた価値は非常にあると考えます。

また「食料」や「エネルギー」に関しても、外国からの輸入に頼って私たちの生活は成り立ちます。

ところで、今後の世界状況を見てみると、20数年前は人口40億人と言われたのが、現在は70億人を突破しました。まもなく90億人になると予想され、ほぼ間違いないデータとも言われています。

私たちの生活に絶対に必要である「食料」や「エネルギー」は将来、他国との取り合いになり、需要が増せば当然価格はつり上がります。また現在は円高で安く外国の資材を購入できますが、円高が反転し円安になれば、今よりもずっと高い価格で購入しなければなりません。

給与が伸び悩む（逆に下がる）中で、生活コストは上昇し、ますます私たちの生活に余裕はなくなります。

このように考えていくと、外国に頼る「食料」や「エネルギー」をいかに自国で生産し、私たちの将来の生活に向けて準備していくかが大変重要になってきます。オーストリアでは森林整備に出る間伐材をバイオマスエネルギーに変えて、国家の30%程度のエネルギー資源に充てているとも聞きます。水力・風力などの自然エネルギーも松本では豊富です。

新しい雇用は、新しいビジネスだけではなく、既存のビジネスを調査研究することで、創出することができるのかもしれませんが。

年金問題も雇用によって解決

退職後の年金問題も国家財政において非常に重要な問題となっています。受給年齢の引き上げの話や消費税増税など、国家全体が暗くなる話が続きます。

しかし視点を変え新しい施策を打ち出せば、年金の問題も解消するかもしれません。

「働くことの出来る高齢者は働いてもらう」

「そして収入という形で年金を得る」

という考えです。朝起きると、早い時間から道を掃除したり、資源回収をする年配の方々を見ます。本当は元気な私たちの世代が行わなければならないことかもしれません。

その働く姿を見ると、年配の皆様ももっともっと働きたい・・・と感じてしまいます。

年配の方々でも社会貢献が出来、しかも収入の得られる仕事をいかに創出するかが重要な課題であり、施策であります。荒廃した農地が問題になっています。農地をレンタルし年配の方々に意欲的に農産物生産に勤しんでもらうなども一つの施策かもしれません。

年金の問題は国家が預かる問題ですが、松本政経塾では、地方都市に各種施策を移管し、県や基礎自治体への権限移譲を努めるべきという考えも出ました。

(3) 健康

松本市では積極的に「健康」というキーワードで市政が行われています。他の基礎自治体と遜色ない、いやそれ以上の各種施策が進み、健康面では先進的な基礎自治体といえるでしょう。

問題視すべきは「健康」を得るためには「コスト」もかかるということです。前段でも記載しましたが医療費増大に歯止めがかからない状況です。またその多くを高齢者医療が占めています。「健康になる（病気を治す）」ことは大変重要なことです。しかし消費税アップや社会保障費の増額によって、ますます生活が苦しくなることも事実です。医療費の抑制はまったなしの課題であると考えます。

中国のことわざ「医食同源」というものがあります。予防医学の推進や、自然治癒力のアップ、また医療費が増大しない医療制度など、様々な施策を考え、人間にとって「真の健康」実現に向かうべきと考えます。

松本シリコンバレー計画（医療面）

ますます高度化する医療。特効薬の開発や先端医療機器の研究は膨大な費用が発生します。外国と比べ日本では、医療分野の研究開発は決して優位であるとは言えません。他国では製薬会社と大学と病院などが連携し、新薬開発を進めているとも聞きます。製薬業界では「特許」が重要であり、どのくらいの新薬（特許）を保有しているかが企業の生き残りの条件となります。

また多くの先進国は高齢化が進んでいきます。中国では「一人っ子政策」により、他の国に類をみないくらい、高齢化社会に突入しています。高齢者医療や高齢者福祉に対する対策は先進国全ての喫緊なる問題となりましょう。

大自然に囲まれ、ストレス無く研究に没頭できる信州松本は、企業や大学の研究機関にとって魅力ある都市です。また東京と大阪の二大都市にも三時間程度で移動できるため交通の便の良き場所でもあります。

工場誘致では様々な要因によって空洞化が発生します。現に多くの精密機械工場が無くなり、廃業に追い込まれました。今後は、研究機関の誘致が大切になってくるのです。

(4) 経済的余裕

誰もが多くの収入を得て、贅沢をしたいと考えるものです。しかし今注視すべきは「格差」という問題です。アメリカの模倣をしてきたわが国日本。その模範であったアメリカは「格差」という問題を突きつけられています。一部の高額所得者と多くの低所得者。アメリカ経済のお金が一部の高額所得者に集中することに怒りを感じ、デモも多発しています。

昭和の頃多くの日本人は「中流階級」と言われました。隣を見ても、自分たちと同じ生活をしていました。映画「オールウェイズ」で映し出される人々の方が、今ほどの裕福な生活ではありませんが、皆幸せだったかもしれません。

一生懸命働いても生活保護で得る収入より低いなどの報道もありました。もちろん社会ですので、「格差の無い」ことなどありませんが、「互助」の精神の中で、「自分さえよければ」という考えから脱却し富める人もそうでない人も助け合う社会作りをしていかねばなりません。そしてそのような価値観を得ているのが日本人であると考えます。

倫理道徳力の教育＝教育県長野の再興

以前より長野県は教育県と呼ばれていました。しかし学力検査などは決して誇れるものではありません。私が大学受験をしたころは、全国の中で二番目に低い状態でした。今後教育の中で重要視すべきものは「人間教育」であり「倫理道徳力教育」であると考えます。

前に東京大学出身のIT企業の経営者がテレビを賑わし、そして社会的背信行為で逮捕されたことがありました。頭が良い、すなわちテストの点をとれることが教育の目指すところでしょうか？

PFドラッカーは「社会活性化には起業家が必要である」と訴えました。経済活動の中では、多くの起業家が輩出され、新しい産業や商品を作り出し、社会的進歩を進めています。しかし残念ながら「起業家教育」は日本の学校では行われません。会社の代表となる者にも「人徳」や「思いやり」などが欠けていれば、その従業員だけでなく社会的も悪影響を及ぼします。そういう人物は至るところにいるのが残念です。

幸福論を考えていく上で、実は非常に重要且つ不可欠なことが「倫理道徳力」です。コップの中の水の話をしました。ものの見方で「幸せ」にも感じ「不幸」にも感じます。不自然なる欲求はすべてをおかしくしてしまいます。そしてその影響力が大きい者が、民間の企業であれば「社長」であり「起業家」です。

また官僚、公務員や学校の先生などのトラブルの話も後をたちません。公職であり公僕である職業に就いた人が様々な問題を発生させています。これは国家運営をしている議員でも同じような報道がされています。

今日本をおかしくしている、幸福感の得られない現象は「倫理道徳力」の欠如からではないでしょうか？「国家百年の計」即ち正しい国家や地域づくりには「教育」は欠かせないファクターなのです。

(5) 子育て

ふと不思議に思うことがあります。私も三人の子どもがいます。子育てにはお金がかかります。だからでしょうか？「子ども手当」という手当をちょっと前まで頂いていました。しかし私の両親の時代はそのような援助もなく立派に子どもを育てていました。

もちろん、私の両親の世代（80歳）の子育てが正しいというつもりはありません。受験戦争という中に置かれ、人をけ落としても良い大学に入ることをゴールに設定され、猪突猛進に進んだのが私たちの世代です。今の時代よりもっとお金がかかる時代かもしれません。

しかしなぜ今「少子化」なのでしょう？子育てをしやすい環境作りということで国では多額の補助金が使われてきましたが、全くの効果がありません。子育て支援という名目で各種施設が建ちました。税金が投与されました。日本の出生率は下がる一方です。

過疎化の進む村では「中学生まで医療費無料」と訴えても、若い世代の流出は止められません。学校は30人学級を導入し、一人一人にきめ細かい教育を訴えています。しかし空き教室があり、三クラスあった学年が二クラスになるなど・・・今後ますます子どもの数が減ります。

10年後、20年後は生産人口が減り、その不足分を埋めるために、国政に関わるどの党も海外からの移民に関し容認をしています。安い労働力の進出で、私たちの子どもはますます雇用に苦しむかもしれません。ヨーロッパのように犯罪が増え、安全だった日本が崩れていくかもしれません。子育て支援という「響き」の良いキャッチフレーズに踊らされ、国の本当の課題に何ら取り組みしていないように私達には思われます。

人口減少を当たり前と思うこと

世界の潮流は人口増加です。今後90億人突破は間違いない事実と言えましょう。増加する国々は発展途上の国です。反面先進国の多くは少子高齢化となり、人口が減少すると予想されています。もちろん各国で人口を増やす、維持する施策は形を変えておこなわれています。しかし特効薬は見つかりません。ヨーロッパでは早くより、人口維持のため移民政策を進めていますが、様々な問題に直面しています。格差は広がり、治安が悪くなるなど・・・あるレポートでは移民政策は失敗だったとも言われています。

わが国日本では全ての都道府県で人口減少が始まりました。日本のいや世界の歴史の中で経験のしたことのない出来事です。過去に類のない事例なので、マニュアルも無く、どのような施策が正しいか誰もが予想や想定が出来ません。

ただ言えることは、地球規模から考えて、先進国が人口減少をすることは「神の手」であり、もうこれ以上人間は増えてはいけないと言っているように思えてなりません。

問題は結婚しない若者

子どもを何人生むのか、育てるのは各家庭の事情によるものが大きいと思います。戦時中のように「多く生む」ということは国家が語るものでは無いのかもしれませんが。問題にすべきは結婚しない若者の増加です。もちろん「収入面」などの生活の不安から結婚をしたくても結婚できない若者もいるでしょう。しかし今回のレポートにあるように「一人暮らし」では幸せになれないという仮説で言えば、積極的に家族を持ち、幸せは人との繋がりで初めて得られることを提唱し、松本市民全てが幸せになるように進めて行かなくてはならないと思います。

V. 終わりに

私たち松本政経塾は月2回の勉強会を重ねています。当初は地域における課題や経済・経営についての勉強会を中心に行ってきましたが、東日本大震災のあと、国家に関わる問題について取り組むようになりました。地域における問題と国家における問題では、その影響力は国家における問題の方が大きいと思われるからです。東日本大震災で大きな問題となった原子力の問題。私たちエネルギー政策において原子力エネルギーは必要であるか、それとも必要ないか、市民のレベルから問題提起し様々な自問自答を繰り返しました。

そのあとは社会保障や福祉の問題。そして移民問題について行ってきました。国が進めた施策や進めようとする施策に対し大きな疑問符を持つと共に、私たちの未来に対し明るさを感じられなくなった時に、今度のテーマを「ブータン」について勉強会をしようと決めました。

ブータンは国民を幸せにしている、または幸せにしようとする施策を進めている・・・程度の知識からのスタートです。その時は、国民総幸福度（GNH）という単語すら知らない状況でした。

そこでホームページから知り得る情報で1回目の勉強会を開催しました。開催する前にふらっと一人の男性が教室に入り、「私、海外青年協力隊でブータンに行ってきました」という話。松本市役所勤務の井上さんでした。無理を言い、実際にブータンを行った感想などを話してもらおうということで2回目の勉強会を開催。

当初は1回のみ勉強会で終わられるはずが、調べれば調べるほど非常に興味深くなり、また「幸福」という抽象的な概念を追求すればするほど、松本政経塾のメンバーは話が盛り上がり、ついには4回の勉強会を得て、今回のレポートを作りあげました。

全ての人々が幸せになることは誰もが望むことです。異論のないことです。

しかしその実現にはとてつもない高いハードルがあるように思います。まずは「幸せ」という感覚は千差万別であり、その人の置かれた状況や心持ち一つで変わります。もしかして日本人は「飽食の時代」と言われるように物に溢れ、既に幸せなのではないだろうか？これ以上幸せを求めても何も無いのではないだろうか？あるいはこれ以上の幸せは他国の人を不幸にするのではないだろうか？という考えもありました。同時にこれだけ物に溢れる社会の中で、毎年3万人以上の方が自殺をする社会はどこかおかしいところがあるのではないだろうか？という考えも浮かびました。

勉強会の中でも「心の豊かさ」というキーワードが出てきました。この言葉は、2000年の青年会議所に入った頃より（もしかしてずっと前から）言われ続けたものです。今回は「心の豊かさ」とはどのようなものであり、どのようにすれば実現出来るかを記載したつもりです。そして出来るだけ普遍的、即ち「今」も幸せを実現でき、「未来」も幸せを得ることが出来る永続的なアクションプランになるようにレポートを作ってみました。

最後にこのレポートをお読みいただいた各分野の皆様方にとって少しでも参考になり、共感を得て頂き「日本で一番住みたい町＝松本」になれば、松本政経塾を運営している私としても感無量です。

会議参加者名簿（意見提案者）

北原 修（塾長）

小澤 英俊 坂井田 金一 堅谷 竜志 水野 徹哉

松本大学学生有志



地域から日本を変える！未来創造塾。

松本政経塾

地域を変えるのは、地域の人財のみである。

【松本政経塾について】

2008年設立。毎月約40名ほどが集まり、各種研究会・勉強会を開催しています。様々な要因により地方経済が破綻へと向かう今、コミュニティービジネスや、クールビジネスの創造に止まらず、地域を浮揚させる政治・経済の頭脳集団の創出が必要になると考えます。松本政経塾において、地域経営の理念を学び、時代認識を深めた人材が、政治や経済、行政、街づくりなど様々な分野で地域の前進と繁栄に貢献してくれることを目指し活動し、地域の未来に大きな夢を描き、毎月松本政経塾を運営しています。

<http://www.msjuku.com>

お問い合わせ → info@msjk.com